

息が詰まるとはこのことを言うのだろうか。

教室はひどく息苦しい雰囲気であった。

夕礼は既に終わっている。後は一斉に下校というはずであった。だが、そうする者は誰も居ない。

教室の後ろにフェイトとシユテルが対峙している。互いに鋭い視線で居抜いている。敵意に満ちた視線である。特にシユテルの視線は敵意を通り越して、完全に殺気に満ち溢れているのであった。

周りの反応はさまざまであった。すずかはおろおろとしており、アリサは呆れ顔。レヴィは事態がよく呑み込めておらず、頻りに視線を泳がせている。はやてとディアーチェは揃って頭を抱えていた。

他の級友達も似たような反応であった。うろたえる者。呆然とする者。辛うじて余裕がある者は隣の間人と何かを囁き合っている。

教室の出入口にも他クラスの者が人だかりを作り、様子を遠巻きに窺っていた。

全員の注目がシユテル、フェイト、そして、なのはの三人に集まっている状況である。なのははどうしているのか。なのははフェイトとシユテルの間に立っており、完全に固まっていた。顔は耳まで真赤である。

誰も動こうとしない。なのは達三人に誰も絶対に近附こうとしない。彼らは本能的に知っているのである。関つてはならない。関つたら碌な目に合わない。

ようやく正気に戻ったなのはが徐に口を開いた。

「えっと、フェイトちゃん、シユテル?……」

名を呼んだところで続く言葉が見附からない。

なのは名前を呼んだことで、二人は絡んだ視線を無理矢理に解いて、なのはに顔を向けてきた。

「ねえ、なのは」

フェイトが言った。切羽詰まった表情で懇願したような口調である。

「ナノハ」

次にシユテル。彼女にしては珍しく悲しそうな表情である。

そこで再び沈黙の帳が降りた。なのはは一層困惑した表情を浮かべる。

二人が揃ってなのはに一步詰め寄ると、なのはも一步退く。それを繰り返しているうちに背中が壁際のロッカーに当たった。もう逃げられない。

なのはもう訳がわからなかった。何を言えばいい？ どう言えばいい？ どうしてこ
うなったかは釈然としないが、下手に答えたら二人に刺されることは流石にわかっていた。

「ナノハ、はっきり言ってください」

「はっきり言つてよ」

二人の声が重なった。

「だからね、二人とも、私の大事な——」

「曖昧に答えないでください」

「逃げないで」

なのはもう黙るしかない。業を煮やした二人が辺りを憚らない大声で言った。

「私とフェイト、どちらが大事なのですか？」

「私とシユテル、どっちが大事なの？」

——事の発端は数週間前に溯る。

「ナノハ、塵取りをお願いします」

その求めに応じて、なのはは塵取りを置くと、慣れた手つきでシュテルは塵取りにゴミを掃きこんでいった。

放課後。掃除の時間。掃除はおおむね順調に進んでいる。二人とも黙々と進める気質だから、こういった作業の進みは早い。

掃きこんだゴミはゴミ箱に入れて、なのはは中身を確かめた。もう満杯だ。これは交換であろうと思つてゴミ袋が欲しいと言おうとすると、シュテルがすつと求めたるものを差し出した。

「ありがとう」

何と気が利くのであろう。

ゴミ袋を交換した。後は裏のゴミ捨て場に行けば、今日の掃除は終了だ。

「私が捨てにいくね」

なのはが袋を持って歩き始めた。

「私が持ちますよ」

「大丈夫だよ」

なのはがシユテルの申し出をやんわりと断った。

「ですが」

そう会話しているうちに廊下まで出る。

「別に大丈夫だよ」

「一昨日もなのはが持ったではありませんか。それでは不公平です」

整然とした説明に、なのはは思わず笑ってしまった。

「シユテルは優しいね」

「いいえ、公平を期すのに優しいもありません」

彼女はそれ以上言うことはなかった。一応言うだけのことは言ったということなのであろう。

玄関を出て裏手に廻ると、見慣れた組合せが居た。

「フェイトちゃん、レヴィ」

呼ばれた二人が手を振ってくる。すぐにレヴィがシユテルに飛びついた。

「レヴィ、掃除は終わったのですか？」

「もう終わったよ。これから戻るところだったんだ」

「それより制服が少し汚れていますよ。また、はしやぎながら、掃除したのですか」

「ごめんなさい。どうしても暴走が止められなくて」

フェイトが項垂れた。何があつたのか想像に難くない。

「いえ、フェイトは悪くありません。悪いのはレヴィです」

「あれは——」

レヴィが反論しようとするも、シュテルが少し睨めつけただけでも勝負は決した。彼女はすっかりと縮こまってしまった。

その光景になのはとフェイトは揃って苦笑い。

にぎやかになつたものと二人はつくづく思った。戸籍のごまかしだとか、この世に住むためのもう少し穏当な感じの偽名をつけたりして、紆余曲折を経てマテリアルズが入学したのであつた。彼女らが入学してから、二度目の春は過ぎ去り、二度目の夏を迎えようとしている。

掃除後のホームルームも終り、早々に下校するだけだ。

外では、初夏の陽光が間断なく降り注いでいる。校門を出たところで、ずずかとアリサはいつものように迎えの車に乗り込んでいった。

なのはとフェイトが先頭に、シュテル、レヴィ、ディーアーチエ、はやてが後ろに附いて行く。

後ろではレヴィがシユテルに今日の晩御飯はこれが良い、あれが良いと頻りに希望を出している。シユテルは律儀にそれは昨日食べただとかを応えている。

はやてやディアーチエ達と別れると静かな下校となる。なのはとフェイトはしばらく海沿いの道を歩いてゆく。堤防の向こうでは、紺碧色の海がどこまでも拡がっていた。

二人の口数は少ない。沈黙。だが、その沈黙は二人にとって何ら障碍ではない。何らかの心地好さがあるのだ。

「それじゃあ、また明日」

「うん、また明日」

そして、いつもの交叉点でいつもの別れる。

これが彼女達の日常であった。

初夏の陽気は気まぐれであった。春の名残を残した穏やかな天気かと思えば、突然盛夏を先取りした暑さをもたらさう。今日は後者の陽光が屋上に振り注いでいる。この暑さのもと、屋上で昼食を摂る物好きはあまり居ない。いつものときと比べて半分程度だ。

このような気候であっても、なのは達はいつものように屋上で弁当を広げていた。日が

直接当たるが、時折風が屋上を撫でてくれるので、思いの外過ごしやすい。

「ねえねえ、知つとる？——さんが」

はやてがいきなり恋愛談義を始めた。

「それ、確かなの？」

アリサが訝った。

「結構確かな話や」

互いを意識しだす年頃である。当然、このような談義を始める人間も出てくる。

特に妙に精神年齢が高い人間が多いこの学園のことだから、そういった話題は普通の学
校より多いようにも思えた。

ほとんどの人間は箸を休めて、はやての出所不明の情報に聞き入っていた。皆、それな
りに興味があるのだ。

「シュテルん、おかず要らないのならもうよ？」

例外が居た。レヴィだ。彼女はそういったことはどうでもいい。恋愛のれの字も知ろう
としない。

「いえ、食べますよ。いきなり、決めつけるのは行儀が悪いですよ」

レヴィに小言を言つて、食事を再開する。

「全く、レヴィはすぐに食べ物に手を出そうとする」

「ええ、そんなことないよお」

「ええではない」

ディアーチエがレヴィに突っ込む。いつもの光景である。その光景にシユテルをも含めた全員が微笑ましそうに見ている。

彼女らの不毛な言い争いは絶ゆることはなく、とうとうシユテルは溜息をついて、

「仕方がないですね」

シユテルは残っているおかずを二つも彼女の弁当箱に入れた。

「ありがとう、シユテルん」

「その代り、夕ご飯の量は少し減らしますよ？」

「そんなあ」

「冗談です」

爆笑。喜びながら弁当を頼張る彼女を尻目にシユテルは食事を再開した。

「シユテルは優しいね」

なのはが言った。

「いえ、ああしないといつまでも騒がしく。迷惑でしょうから」

「そうなんだ。でも、二つもあげちゃって大丈夫なの？」

「別に二つ抜いたところで、直ちに餓死するわけではありません」

「でも、お腹はすくんじゃない？」

「ええ。それは否定しません」

「はい、あげる」

なのはは一つのおかずをシュテルの弁当箱に入れた。

「よろしいのですか？」

「いいよ」

「ありがとうございます」

恋愛談義はいつの間にか収束してしまった。

シュテルは周りを見廻した。いつもと変らぬ日常がある。変らぬ昼休み。同じ面子。なのはとフェイトは隣で坐って、カップルさながらの食事。似た様なことをせずかとアリサが行う。はやては機関銃のように喋り、ディアーチエが突っ込み役に廻る。レヴィは誰も構わずおかずをねだる。そして、シュテルはそのレヴィを抑える。

騒がしくも心地好い集まりであった。

「なのは、相変わらず硬いね」

「フェイトちゃんが柔らかすぎなんだよ——ちよつと痛いかな」

「あ、ごめんね」

放課後、なのはとフェイトは高台の公園で練習をしていた。三日か二日の間隔で行われる総合トレーニングだ。魔法の練習であったり、体力の錬成をしたりする。

まずは軽いストレッチから。開脚したなのはにフェイトが背中を押す。

交代して、今度はなのはがフェイトを押す番だ。なのはがフェイトを押すと、フェイトの体がびったりと地面に着いた。

柔軟体勢のままのフェイトが訊いた。

「今日のメニューはどうする？」

「模擬戦を久しぶりにやってみたいんだけど」

「そうだね。最近やっていないから、今日は砲撃演習にしよう」

「フェイトちゃん、今さらつとひどいこと言ったよね」

「えっと、そんなことないと思うけど。だって、なのはとの模擬戦だよ？」

「やっぱり、今日のフェイトちゃんひどい」

「ちよつと、なのは力強すぎだつて」

準備運動は軽口を叩きながら行っている、流石に本番の練習になると目付きも変わったものになる。

薄紫色に染まりかけた空に二つの光跡が描かれた。離れたかと思うと、今度は交り、再び離れて行く。

「なのは、無意識のうちに離れてきているよ」

「うん」

フェイトが話しながらバルディッシュを振り下ろしてくる。

なのはは防戦一方であった。

フェイトに砲撃演習と言われたなのははそれに対抗して、今日はクロスレンジの練習だと言いだめたのである。フェイトには有利な練習であり、なのはには随分と不利な練習である。

彼女は専らロングレンジ専門である。それ故、懐に攻め込まれた場合に対処できないことは敗北を意味する。

そうなった場合、如何に対処するのが今回の趣旨である。

なのははなかなか隙が見つけられなかった。フェイトの動きから多少の手加減をしてきていることはよくわかった。それが心なしか悔しかった。

桜色の光弾を一気に生成しフェイトに叩き込んでいく。同時に自身もその攻勢に参加する。

白煙で視界が悪くなるも構わず突っ込む。白煙の先にはフェイトが居た。彼女の突撃を予想していたのか、プロテクションが張られていた。

レイジングハートの先端がそれにつかつたかと思うと、鈍い衝撃が全身を走った。そ

れを合図にして、なのははバスターを放った。

フェイトが一瞬驚いた表情を浮かべたかが、彼女はそれに対抗せんとごとくプラズマスラッシュャーを放つ。

白桃色と金色の光が混じり、そして、耳を聳するほどの音が二人の耳朶を震わせた。

白煙が晴れると、ぼろぼろになった防護服を纏った二人の姿が確認された。二人とも肩息の状態だ。

「ドロー？」

「引き分けだね」

そして、ふらついた動きで地上まで降りた。先に防護服を解除して、次に結界を消滅せしめる。結界の消滅と同時に市街の微かな喧騒が耳に入った。

「お疲れ様、なのは」

「うん、お疲れ様」

なのはがよろめいた。フェイトが胸で受け止める。

「ありがとう」

なのはは赤面した。

「ちょっと無理しすぎたかな」

「ずっとクロスレンジはやっぱりきつかったかな」

「ベンチで休もう」

二人で近くのベンチに腰を下ろした。なのはは自然とフェイトに寄り掛かる恰好になった。フェイトがそれに赤面しないはずがなかった。

夕暮れ時で風は凪いでいた。火照った体はなかなか冷やされない。

「ジュース買ってくるね」

フェイトが腰を上げた。

自販機の前で、なのははベンチでぐったりするなのはの姿を無為に眺めた。そうしていると、フェイトは心の高鳴りを覚えた。

彼女がなのはのことを意識し始めたのはいつの頃からだろうか。前々から深層心理的には意識していたことに間違いはなかった。

ただ、級友達にそのような関係のものができたのを見たり、はやてから同じような話を聞かされたりする——そういったことを繰り返すうちに、それが表面的に現れるようになり始めたのである。

しかしながら、フェイトには勇気がなかった。なのはに気持ちや勇気はなかった。視線を逸らす。高台の公園。海鳴の市街が広がり、さらに向こうには広大無辺な海と空が広がっている。

西に退いた太陽の陽光が、海鳴の家々の瓦のうわぐすりやスレート材を鈍く光らせ、都

心の高層ビル群のミラーガラスを一際輝かせていた。

フェイトは足音を殺して、なのはの首筋に冷たいものを当てた。

なのはは電流に感電したかのように飛び跳ねた。

「もう、いきなりなんて」

「ごめんね」

古典的な悪戯だ。

ジュースを開ける。冷たい液体が未だ火照った体を一気に冷やした。

飲み終えて、息もようやく整ったところで二人は立ち上がる。立ち上がろうとしたところで、なのははまたよろめいた。

「フェイトちゃん、助けてくれる？」

彼女は微笑笑して左手を差し出した。フェイトは差し出された手を引っ張り、なのはを立たせたのであった。

今日の練習は無事に終了した。

「なのは、また明日」

交差点でなのはと別れる。なのはが見えなくなったところで、街燈が瞬く帰り道を急ぎ始めた。日はさらに退いて、薄紫色に染まった領域は東の空からだんだんと広がっていく。帰る頃にはちょうど夕食の時間であろう。

昼は学校に行き、夕方は魔法の練習か時々任務。繰り返して単調めいた毎日かも知れぬが、その生活を送っている本人達にとっては充実した毎日である。

半ば慣れが首をもたげてきた今の生活はフェイトにとっても心地好いものである。

一方で、なのはに対する気持ちには変化が起き始めていたのは事実であった。焦る必要はないと考えていた。ゆっくりとそういた関係つまり恋人同士という関係に落ち着けばよいと、フェイトは根拠なく確信していたのであった。

掃除の担当場所は週毎に変る。今週のなのはの組は階段の担当になった。

なのはは上の段から箒でゴミを落としていく。シュテルは手すりの部分を水拭きしている。湿った重い空気のせいで、段や手すりの埃が頑固になる季節である。雑巾はもう真黒になっている。

「この季節は嫌なものですね」

愚痴をこぼす。湿気が多くなると、本も湿気にやられる。面倒な季節だ。

そこをゴミ袋を提げたレヴィが通りかかる。彼女はいつものようにシュテルに抱きついた。

「シユテるん、お疲れ様！」

「……もう終ったのですね」

「掃除なんか、僕にかかればちよろいもんさ」

「ちよろいと言いなながら、先程バケツをひっくり返される音が聞こえました。続いて、レヴィの悲鳴が聞こえたのですが、あれは何なんでしょうね」

シユテルが冷ややかに言った。

彼女は顔を真赤にして、

「いや、あれはね！ あれは毘に嵌ったの」

「雷光の戦士が嵌められちゃっていいの？」

なのはの素朴というか当たり前の突込みにも、レヴィはますます狼狽する。

「いや、だから、あれはね——」

必死の弁解が数分も続く。なのは達は微苦笑しながら聞き続けた。

「レヴィ。こんなところで何の油を売っておる」

怒りに満ちたディアーチェの声が場を切り裂いた。レヴィが声の方向に視線をやると、腕組みをして眉間に青筋を立てたディアーチェの姿があった。

「用は済ませたのだからな」

「えっと」

彼女は持っているゴミ袋を隠そうとした

「レヴィが持っておるそれは何だ？」

「えっとね、これはね」

「まさか、まだ捨てていないと？」

「今から捨てに行くところなんだ」

「なら、さっさと捨てに行け！ この馬鹿者が」

ディアーチェの怒鳴り声に押されるようにして、レヴィは走り出す。

「あ、待って、階段は走っちゃ」

なのはが慌てて注意するも僅かに遅い。案の定、レヴィがつまづいて盛大に宙を舞った。その動きはゆっくりに見えた。ゆっくりとレヴィが落ちていく。

そのまま下の段に居るのは容赦なく巻き込んだ。悲鳴すらあげられぬまま、二人は階段を転げ落ちた。鈍い音がした。

反射的にシュテルが彼女らに駆け寄った。

「ナノハ、大丈夫ですか！」

シュテルはまずレヴィの下敷きになっているのはの無事を確認しようとした。

「だ、大丈夫だよ……」

下敷きになったままのなのが弱々しく笑いながら応ずる。